佛教大学大学院紀要　文学研究科篇　第37号（2009年３月）

ダンの宗教詩にみられる世俗性

── ‘Holy Sonnet 9, 14, 15, 19’ を中心に ──

山　本　千鶴子

〔抄　録〕

この小論はジョン・ダン（John Donne, 1572-1631）の宗教詩に見られる世俗性の考察である。詩人は人生の前半において才気煥発、情熱的な世俗の恋愛詩をよんでいる。しかし、宗教界に入ったダンは前述の世俗の愛から脱却することができたのか。その問題を ‘Holy Sonnet 9, 14, 15, 19’ を採り上げて考察するのが本論の目的である。詩人は自分自身の心の中でキリストの贖いを見つめその崇高さを崇めながらも世俗の愛を拭いきれていないのが分かる。ダンは過去によんだ肉欲の愛に関する恋愛詩のことについて触れ、改悛の情を表わすが、それは困難であることをうたっている。詩人は自分の身体を小世界であると述べ、その中で生じる罪の、涙の水と火による浄化を願う。しかし、前者によるダンの罪の浄化は無理であり、後者のものには二つある。それらは世俗の情欲と嫉妬の火であるが、詩人はこれらの火で浄化されるのをも求めず、神と『詩篇』に出てくる神の家に憧れる炎のような熱意による浄化を願う。しかし、詩人は世俗の愛を忘れにくいと述べる。こうして詩人は彼自身の揺れ動く心中についてうたう。それは詩人の生きる喜びと神への接近との間に揺れ動いているものである。このように、詩人は宗教界に入っても世俗の愛を払拭できないのが理解できる。

キーワード　愛、キリスト、宗教詩、世俗性、Holy Sonnet

序　　論

ジョン・ダン（John Donne, 1572-1631）は人生の前半においてうたった愛の詩 *Songs and Sonnets* も、その後半でよんだ *Divine Poems* も James 1世の時代のものである。その宗教詩はおそらく大体が1604年と1623年の間に書かれたものである。ところでダンの宗教詩を編纂したヘレン・ガードナー（Helen Gardner, 1908-1986）は宗教詩の定義についてどのような立場をとっていたのであろうか。彼女はその著書 *John Donne: The Divine Poems*（1969）の序で、Waller 伝の Johnson、“Religion and Literature” の Eliot あるいは Marvell の “The Coronet” などを引用しながら、宗教詩は主題が限定されている事、詩人のとるべき態

度があらかじめ決められていることなどから緊張があまりなく、詩の強い影響や印象も少ないとの立場を一応とっている。[1]しかし、その後の彼女の著書 *Religion and Literature* （1971）の中で、その定義について Gardner はキリスト教の信仰詩だけを指して宗教詩と呼ぶのではなく、ひろく宗教的献身の告白詩を宗教詩であると定義づけている。[2]筆者はこの定義にそってこれらの詩を考察する。それではダンの宗教詩に関して彼女はどのように考えているのだろうか。それは啓示された真実への苦悩を歌っている[3]と Gardner は示唆している。

詩人ダンの妻の死は紛れもない事実である。このことに因んで、ダンが妻 Ann の死後、キリストを恋人の化身として二つの詩だけをよんでいると Gardner は述べている。そして、彼女は詩人の宗教詩を支配しているイメージはキリストを救世主、すなわち罪と死を支配する勝利者のキリストであり、ダンの想像力がこのキリストの姿を呈示する力強さは、詩人の心理的欲求の大きさを測るものであって、その欲求は彼の宗教詩における最もすばらしいものの主題であると、次のように述べている。

> The image which dominates his divine poetry is the image of Christ as Saviour, the victor over sin and death. The strength with which his imagination presents this figure is the measure of his need, and that need is the subject of the finest of his religious poems.[4]

この引用から詩人が抱く神の子キリストに対する強いイメージが、彼の詩の主題となっていることは明白である。ダンの ‘Holy Sonnets’ の形式は連作（sequence）のソネットで、弱強５歩格14行である。イタリア風の８行（octave, 韻は abba / abba）のあとの６行（sestet）の韻を cdcdee あるいは cddcee とする２種類をほぼ一貫して用いている。内容は宗教的主題であり、黙想、最後の審判と神の慈悲、罪と死そしてキリストの贖い等とされている。

ところで、宗教界から見る世俗性の〈世俗〉とは私たちが当然のごとく日常生活を送っている世の中のことである。人々は子孫繁栄を望んで結婚をし、子供を生み、次の世代へ繋いでいく。そこには、生、物欲、衣食住のことが問題になる。このことに関して、榎十四郎氏は彼の著書の中で、「『世俗』の『俗』は……キリスト教でいえば『聖』に対する語である。世俗社会とは、人間社会を宗教的観点から見た言葉であり、基本的に宗教的価値が支配的でない社会という意味である。……その要件は人間の生存に関わるものである事が認められる。性、生殖、血族、衣食住……」[5]と述べている。そして、ダンも宗教界に入るまでは「人間の生存」に関与する愛のうたをよんでいる。

さて恋愛詩の中では情熱的で、世俗の詩をうたっていた詩人が、その後、宗教界に入り、前述の愛を捨て去る事が出来たのか、その問題についてこの小論は、‘Holy　Sonnet 9, 14, 15, 19’（Ed. John Carey, 1990）を中心に考察する。

1

最初に、‘Holy Sonnet 9’を考察する。この詩はDonneの彼自身の魂との対話である。詩人が心の中で見る十字架に架けられたキリストに対するものであり、像に彫られたり絵に描かれたりしたものではない。そこではキリストは苦痛に歪んだ外観ではなく、人間の原罪を背負って人々を癒す本来の美しさがある。キリスト自身は人間の犠牲となって傷つけられているが十字架上のキリストは恐ろしくない。１行目に問いかけをし、その問いに答えて詩人は十字架上のキリストを注目するようにうながす。そこにこそ彼の心が住んでいるのである。４行目でキリストの容貌に裁きの日を恐れさせるものがあるかどうかを調べる。しかし、そのようなものは、受難のために消えている。そのことが５行目から８行目で説明されていて、眼光を和らげる涙、貫かれた頭からしたたる血はキリストの厳しい表情を隠し、裁きを告げる舌は悪意ある敵のために神に許しを祈る。その後詩人はかつての世俗の愛を回想し、“profane mistresses”を思い浮かべる。以下にこの詩を引用する。

What if this present were the world’s last night?
Mark in my heart, O soul, where thou dost dwell,
The picture of Christ crucified, and tell
Whether that countenance can thee affright,
Tears in his eyes quench the amazing light,
Blood fills his frowns, which from his pierced head fell,
And can that tongue adjudge thee unto hell,
Which prayed forgiveness for his foes’ fierce spite?
No, no; but as in my idolatry
I said to all my profane mistresses,
Beauty, of pity, foulness only is
A sign of rigour: so I say to thee,
To wicked spirits are horrid shapes assigned,
This beauteous form assures a piteous mind. (C. ‘Holy Sonnet 9’ ll.1-14)[6]

今のこの時が世界の最後の夜であったとしてもどうだというのか。
ああ、魂よ、貴方のすんでいる、私の心の中を注目してください。
十字架に架けられたキリストの姿がある。そして、
その表情が、お前を恐怖におとしいれることができるかどうかを言いなさい。
彼の目に浮かべられた涙は、恐ろしい目の光を穏やかにする。

貫かれた頭から血が流れ出てその血は、彼のしかめた顔の皺を埋める。
そしてあの舌がお前を地獄に落とすと宣告できるだろうか、
そしてその舌は彼の悪意ある敵のために、許しを祈ったのではないか。
いや、いや、そうでなくて私の美しい女性を崇拝する中で、
私は全ての私の世俗的な恋人に対して、次のように言ったものだ。
美は哀れみを表わすが、醜さは手厳しさを表わすだけである、と。
それと同じように私は今お前に言おう、
恐ろしい姿が悪霊に与えられている、
この美しい容姿は、哀れみ深い心を保証しているのだ、と。

（「聖なるソネット９」ll.1-14行）

５行目の「恐ろしい目の光」“amazing light” は前述したように十字架上のキリストの眼光を意味している。キリストの受難は彼を見ている人々を癒す。この事は新約聖書『ペテロの第一の手紙』第２章24節が関与している。「さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである」(7) （“Who his own self bare our sins in his own body on the tree, that we, being dead to sins, should live unto righteousness: by whose stripes ye were healed.”)(8)と明示されている。

このように、キリストが人類の原罪を背負ってくださったので、人は十字架を見ると慰められるというキリスト教の教義がこの詩の背景にある。上記の引用の “Who his own self bare our sins in his own body on the tree” にはキリスト本来の人間に対する優しさと無言のメッセージが表れている。７行目の “that tongue” については、『ルカによる福音書』第23章34節にキリストの言葉が明示されている。「そのとき、イエスは言われた、『父よ、かれらをお許しください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです』。」(9) （“Then said Jesus, Father, forgive them; for they know not what they do.”)(10)とキリストが、神の子である彼自身を罰している悪意ある人々のため神に祈ったことを表わしている。11行目においては “a sign” を “Beauty” の後ろに補って “Beauty” を主語、“is” を 動詞そして “a sign” を補語とし、“Beauty is a sign of pity” の語順になる。そして、最後の行の “This beauteous form assures a piteous mind” は十字架上のキリストの姿を指し、宗教詩的にまとめている。言葉の遊びが12行目の “A sign”、13行目の “assigned”、14行目の “assures” そして、13行目にある、“wicked” “horrid” にも見られ、音が響いている。上記に述べたようにこの詩の主題は詩人の心の中で見る神であり、キリストの贖いであると考えられる。そして、この詩の後半に世俗の恋愛詩の中における女性に対する愛の説得の方法が神に対して用いられている。つまり、世俗社会の恋人達に哀れみを示すことを求め、それが得られるときはその恋人達の顔

は美しく、手厳しさしか返さないものは醜い顔であった。このことより詩人はこの詩の前半においてはキリストの贖いについて述べながら後半６行においては世俗の愛を拭いきれないことを示している。ここで、この詩を離れて、‘Holy Sonnet 14’を考察する。

2

‘Holy Sonnet 14’の主題は目に見えない‘sin’であって罪ゆえの涙を強調している。この詩の中で、詩人は過去の恋愛詩でうたった溜息と涙のことをよみ、心からの改悛のための恩恵を願っている。この詩は 昔の女性との喜びを思い出し、神への罪と罰と言う言葉に宗教的な考えが窺える。それでは、この詩を以下に引用する。

O might those sighs and tears return again
Into my breast and eyes, which I have spent,
That I might in this holy discontent
Mourn with some fruit, as I have mourned in vain;
In mine idolatry what showers of rain
Mine eyes did waste! what griefs my heart did rent!
That sufferance was my sin, now I repent;
Because I did suffer I must suffer pain.
Th’ hydroptic drunkard, and night-scouting thief,
The itchy lecher, and self tickling proud
Have the remembrance of past joys, for relief
Of coming ills. To poor me is allowed
No ease; for, long, yet vehement grief hath been
The effect and cause, the punishment and sin.（C. ‘Holy Sonnet 14’ ll.1-14）[11]

ああ、できることなら、昔の溜息や涙の雨が、再び
私の胸とこの目に戻ってきて欲しい、それらを私はもう使い果たしたものだ。
そうすれば、私はこの聖なる悲嘆のなかで、嘆き悲しみつつ、
何らかの益を得られるだろう。昔の悲しみは無駄だった。
私の偶像崇拝の中で、私の目は涙の雨をどれほど無駄に流したことか。
どれほどの悩みが私の胸を引き裂いたことか。
あのような苦悩は、私の罪であった。いま私は後悔する。
昔苦しんだので、改めて苦しまなくてはならないのだ。

飽くことなく飲む大酒のみ、そして夜に自由に動き回る盗人、
我慢できない好色漢、自己満足のおごり高ぶる男達は、
来るべき苦しみの救済のために、
過去の喜びの思い出を持っている。それなのに、哀れな私には、
何の癒されるものもない。というのは、長くて、さらに激しい悲しみが、
結果と原因であり、罪と罰の双方となってしまったのだ。

（「聖なるソネット14」1-14行）

‘Holy　Sonnet 9’で払拭できない世俗の愛がこの詩にもみられる。1行目の“sigh and tears”はダンが若いときに歌った恋愛詩の中のものである。昔の“idolatry”の日々を想い、現に“holy discontent”の内にあって、かつては空しく悲しんだものであったが、いまは“some fruit”のある嘆きを持ちたいと思っても“those sighs and tears”はすでに使い果たしてしまって心からの悔悛のための恩恵の祈念は叶わない。

‘Holy Sonnet 9’の9行から14行では、十字架上のキリストが表わす表情を、偶像崇拝にも似た世俗の恋愛における女性の顔と心の関係を比喩にして示し、その比喩の裏によこたわる根本的な相違、つまり、世俗の愛と神の愛とを並べることによって聖と俗が対比されている。この対比のように、ダンは“some fruit”に関して神の救済の祈念をしているのであるが、彼は世俗の愛を思って深い罪を感じており、自分は神の救済の恩恵を得るのに値しないとか、神に対する絶対的信頼が得られないとかの嘆きをもらしている。それは、神の救済の恩恵を得られないだけでなく、詩人の心を神にむけてくれる恩恵も得られない状態である。つまり、世俗の愛と神の愛を並置することによって、その絶対に交じり合うことのない関係を明確にしている。ここに真の宗教家であれば世俗の唄の中でうたったものを何故戻って欲しいと祈念するのかという疑問が生じる。それは、詩人が過去の世俗の恋人との愛と喜びを思い求めるからである。さらに詩人は過去の涙や悲痛について考える。昔は精神的な愛というよりは肉欲のために苦しんだので、今思えばこの苦しみは罪なのであると詩人は後悔する、しかし何故“I repent”しなければならないのか。ダンは前の行で、偶像崇拝のための涙と溜息がもう一度戻って欲しいと願っているではないか。ここに至って詩人が世俗のことを忘れられない本音と、宗教家としての建前が読み取れる。真の宗教者になっているのであれば世俗社会のことなどは念頭にないはずである。それなのに、過去の世俗の苦しみが原因となって、今の宗教者である詩人を苦しめるとうたう。聖職者でありながら世俗の愛を思う、そのような事では神の救いはない。

詩人は、かつては世俗の悲痛を味わい、今は恨みを味わう。同じ苦しみが過去の罪であり、現在の罰なのだとうたい、ダンは自分の現在の悲惨な状況を、大酒のみ、盗人、好色家、高慢な人間のそれと比較する。そして、これらの人間は、この世の終わりの時にキリストが神の国から正義を持って再来することを恐れている。なぜ彼らは彼を恐れるのか。それは、「彼らは、

やがて生ける者と死ねる者とをさばくかたに、申し開きをしなくてはならない。」[12]（“Who shall give account to him that is ready to judge the quick and the dead.”）[13]からである。前述の俗人達は昔の世俗社会における快楽の記憶に耽りながら、来るべき禍に対する不安をしばらくの間は逃れることができる。しかし、詩人にはそれがなく、やはり、“Because I did suffer I must suffer pain” という反省に戻っていかなければならない、そして、彼の悲しみは、最後に “The effect and cause, the punishment and sin.” となる。ここに詩人が世俗の愛についての想いを改悛しょうとするのが窺えるが、それに至る困難さが読みとれる。このようにこの詩の中では世俗社会のものと宗教界の間にダンの揺れ動く心がみられ、嘗ての彼の自由奔放さと変わらないことが分かる。次に ‘Holy Sonnet 15’ を考察する。

3

この詩の冒頭でダンは人間の身体は小さな世界だと述べ、その中で目に見えない罪がもたらした争いを嘆き、その罪の罰である死は免れないことをうたう。罪に対する強烈な自覚が、神に対して救いがたいほどに怖れの念を生み出させる。以下にこの詩を引用し考察する。

I am a little world made cunningly
Of elements, and an angelic sprite,
But black sin hath betrayed to endless night
My world’s both parts, and, oh, both parts must die.
You which beyond that heaven which was most high
Have found new spheres, and of new lands can write,
Pour new seas in mine eyes, that so I might
Drown my world with my weeping earnestly,
Or wash it, if it must be drowned no more:
But oh it must be burnt; alas the fire
Of lust and envy have burnt it heretofore,
And made it fouler; let their flames retire,
And burn me O Lord, with a fiery zeal
Of thee and thy house, which doth in eating heal. (C. ‘Holy Sonnet 15’ ll.1-14)[14]

私は４つの元素と無垢のような霊魂で
巧妙に造られた小さな世界である。
しかし、黒い罪が私の身体の両方を無限の闇に

売り渡してしまった、そして、ああ、両方とも死ななければならない。
最も高いあの天の向こう側に
新しい天体をみつけた、そして新しい土地について書く事が出来るあなたよ。
私は本気で泣いて私の世界を溺れさせるように
私の目の中に地球上で新しく発見された海の水を注いでくれ、
でなければ、もし水死がもはやありえないのなら、私の世界を洗ってくれ。
ああ、しかし、私の世界は焼かれなければならない。悲しい事には
情欲と嫉妬の炎はこれまで私の世界を焼いてしまった、
そして、私の世界をより汚くした。それらの炎を遠ざけさせてください、
ああ、主よ、貴方とあなたの家に憧れる炎のような熱意でもって、私を焼きつくして
ください、というのはその家は焼き尽くす事で私を癒してくれるからです。

（「聖なるソネット15」ll.1-14行）

上記の詩の１行目から４行目は前に述べたように人の身体の小世界である。その中であらがいもがいているのが「しかし、黒い罪が私の身体の両方を無限の闇に　/ 売り渡してしまった、そして、ああ、両方とも死ななければならない。」“But black sin hath betrayed to endless night / My world’s both parts, and, oh, both parts must die.” に見られる。霊魂は肉体とは別のものである事を思うと、詩人に予感されるのは肉体の死と霊魂の死の両方である。詩人はわが身の中にもたらした災いを嘆く。その罪でその罰である死は免れない、St. Paul が「罪の支払う報酬は死である。」[15]（“For the wages of sin is death;”）[16]と言うように、又、エデン（Eden）の園で神がアダム（Adam）に向かって「しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」[17]（“But of the tree knowledge of good and evil, thou shalt not eat of it: for in the day that thou eatest thereof thou shalt surely die.”）[18]と説いたようにである。罪は初めに甘言で彼を誘いながら最後に欺いて「無限の闇」“endless night” に陥らせる。５行目の “You” は天文学者、あるいは冒険家をさす。

人間の小世界にも海に代わる水があるはずだと詩人は考える、つまり、人間の身体の中にある涙の水のことである。そして、ダンはその小世界にある罪を「私は本気で泣いて私の世界を溺れさせる」“Drown my world with my weeping earnestly” あるいは「でなければ、もし水死がもはやありえないのなら、私の世界を洗ってくれ。」“Or wash it, if it must be drowned no more” とうたう。これから分かるように詩人は、彼自身の罪の世界を覆う涙の洪水を求める。しかし、ダンは神がノア（Noah）の箱舟の洪水後、創世記第９章11節において「わたしがあなたがたと立てるこの契約により、……また地を滅ぼす洪水は再び起こらないであろう」。[19]（“And I will establish my covenant with you ...neither shall there any

more be a flood to destroy the earth”)[20]と人間と確約されたことを思い、洪水によって詩人の世界を洗い流すことは望めないので、ダンはせめて洗い清めて欲しいと願う。その後すぐに発想を変えて、「ああ、しかし、私の世界は焼かれなければならない」“But oh it must be burnt” と嘆く。水による浄化が叶わないならば、火で焼き尽くすことによる罪の浄化を願う。そして、今ダンが 嘆くのは「情欲と嫉妬の炎」“the fire of lust and envy” により自分の身体が焼かれているためである。

詩人は宗教界に身を置きながら何故このように思うのだろうか。やはり世俗の愛のことを思うことは罪であると考えたからである。そして前述の二つの火は地獄の火を連想させる。ダンが願っているのは、上記の二つの火ではなく神の “...a fiery zeal / Of thee and thy house,....” である。詩人はわが身が世俗的な炎で汚れているため神を憧れる炎のような熱意によって情欲と嫉妬の炎を消して欲しいと神に願い、わが身を焼き尽くして欲しいと願う。イスラエルの神が家を思う熱意に感動したダビデが「あなたの家を思う熱心さがわたしを食いつくすであろう」[21]“The zeal of thine house hath eaten me up”[22]と『詩篇』で述べたようにである。“burn me O Lord” は昇天することを表わし、身を焼き滅ぼすと同時に永遠を生み出している。そして、詩人の魂が地上の事物から引き離され神へ近づくことで癒されると詩人はうたう。最後に神との対話によって詩人はこの詩を結ぶが、前述のように10-13行目に払拭しがたい世俗への愛に関する未練が読み取れる。ここで、このソネットを離れ ‘Holy　Sonnet 19’ を論じる。

4

‘Holy Sonnet19’ でダンは彼の激しく変化する感情をうたっている。この詩の中にみられる「時々狂気になる」という言葉は、情熱が理性で押さえられないことを表わしている。ダンの多情、多恨をよんでいるこの感情は神の世界に近づくことによる苦しみのように思える。このソネットはダンが自己の心中の矛盾を分析してみせる個人的な問題を扱っている。１行目から13行目までは真実味と人間性が出ており、ダンの本音を表わしている。14行目が詩人の建前で宗教詩らしくまとめている。この詩にも彼（ダン）の本音と建前が見え隠れする。以下に ‘Holy Sonnet 19’ を引用する。

Oh, to vex me, contraries meet in one:
Inconstancy unnaturally hath begot
A constant habit; that when I would not
I change in vows, and in devotion.
As humorous is my contrition

As my profane love, and as soon forgot:
As riddlingly distempered, cold and hot,
As praying, as mute; as infinite, as none.
I durst not view heaven yesterday; and today
In prayers, and flattering speeches I court God:
Tomorrow I quake with true fear of his rod.
So my devout fits come and go away
Like a fantastic ague: save that here
Those are my best days, when I shake with fear. (C. 'Holy Sonnet 19' ll. 1-14) (23)

ああ、私を悩ますため、正反対のものが一つに合流する。
不思議なほどに移り気が
以前と変わらぬ習慣となる。その結果、望みもしないのに
恋愛の誓いにおいても、神の献身でも、私は心変わりをする。
私の宗教的な悔恨は
私の世俗的な愛と同様気紛れでありそして、直ぐに忘れる。
不可解に不機嫌になって、冷淡にも、熱狂的にもなる
祈っているかと思えば、沈黙したり、無限に悔い改めたり、全然しなかったり。
昨日はどうしても天国の神をみなかったけれど、そして今日
祈りで、お世辞を言いながら神の機嫌を得ようとする。
明日には、私は神の鞭を本当に恐れて身を震わせるであろう。
このように、私の神に対する発作が気紛れな悪寒のように
起こったり、消えたりする。だが、この点は別として、
私の最も良い日々であるのは、私が恐れで身を震わすときである。

（「聖なるソネット19」1-14行）

初めにダンは、自分の中の "contraries meet in one" という矛盾した状況に悩まされていると言っている。詩人の悔恨は世俗的な愛と同様気紛れであるため、宗教界に入っても世俗の愛を思い出す。しかし、詩人は世俗の愛を求められない宗教界に身を置く立場にある。故に、ダンはその二つの世界における悩みを抱くようにならざるをえない。そこから最初の行の言葉が詩人の心の中に出てくる。3行目の "that" は so が省略されており、その同じ行の最後 "would not" の後にも change の省略がある。13行目にある "ague" は悪寒、おこり、という病気を表わす語であり、その発作に襲われてブルブル震えている様子を他人が見れば滑稽である。最後の3行で詩人が前述の悪寒に襲われて震えているのを、神に畏敬の念をもって震え

ているのではないとして、滑稽化しているこのソネットは、‘Holy Sonnets’の中で最も holy でない作品であり、祈りの内に神に目を向ける黙想というよりは詩人の自己中心の告白である。この詩の７行目に「不可解に不機嫌になって、冷淡にも、熱狂的にもなる」“riddlingly distempered, cold and hot,” とうたっているように激しく揺れ動くダンの心は、詩人の弱さをいとおしむ大切な力であると言える。「私の宗教的な悔恨」“my contrition” と言っていながら直ぐに反対の言葉「気紛れ」“humorous” とうたっており、詩人の心の不安定と世俗の愛への未練が残っているのを表わしている。最後の行 “Those are my best days, when I shake with fear” は前述のように詩人が神を敬う気持ちを滑稽化していているため神の裁きを受けて当然であると考えたからである。

人間は欲望を持つ醜い生き物であると言われる。しかし、だからこそ、神の愛という高尚なものに憧れるのである。手に入らないと分かっていてなお欲する気持ち、人間的な苦悩である。欲するということは人が生きる証である。詩人はそれを求めて、言葉にしにくい感情をもてあましながら神との絆を求めようとしている。しかし、ダンはなかなか自分の壁を越えられない。神によって詩人が裁かれるのを恐れていることからも理解できる。そして、詩人は語り尽くせない想いを胸一杯に抱えながら、その感情を言葉に切り取ってこの詩をよんでいる。

結　　論

今まで考察してきたように、‘Holy Sonnet 9’においてダンは心の中でキリストの贖いを見つめ、その崇高さを十字架上の神の子を崇めながらも世俗の愛に関する類推を拭いきれないのを表わしている。‘Holy Sonnet 14’では詩人が過去によんだ肉欲の愛に関する恋愛詩のことについて触れ、同じ苦しみであっても過去と現在では異なるとよみ、現在のそれは、やはり神に対する罪と罰であると考え、改悛の情を願うが、そのことは詩人の建前であり本音は世俗の愛への執着が見え隠れする。そして、序論で述べたように、この詩の中において、詩人の世俗社会における人間の生存に関する営みである性、生殖の感情を払拭できない困難さが表われている。‘Holy Sonnet 15’の中で詩人は彼自身の身体を小世界であるとうたう。その世界の中にある彼の目に見えない罪をダンは嘆いて詩人の霊と肉体の両方は死ななければならないとうたう。そして詩人は自分自身の身体を水と火による浄化を願うが、すでに情欲と嫉妬の炎で彼の小世界は焼かれ、汚れてしまっているので、これらの火を遠ざけて欲しいことを神に祈願する。このことより、詩人が彼自身による世俗社会の愛を捨てがたいのが読み取れる。‘Holy Sonnet 19’の中でダンは彼自身の激しく揺れ動く心中についてうたっている。彼自身の個人的な感情であり、それは詩人の生きる力と神への接近による苦しみについてのものであるが、世俗愛を思い宗教的悔恨は詩人の心からのものでなくすぐに忘却するとダンはうたう。このように詩人は宗教界に入っても世俗の愛を拭いきれないで、揺れる想いを抱いているのを表明してい

る。詩人が宗教界に身を置く立場でありながら前述の愛を思う苦悩をうたっているのである。これら 4 つの詩を読んできた私達読者にとってみれば、これらの詩の主題は宗教的なものだけでなく世俗社会に属するものも見られ、またおおいに緊張感を持たせ強い印象を読者に与えている。そうすれば、これらの詩は宗教詩であると言うよりも、人間的感動を呼ぶ文学的な作品であると言うことができる。

〔注〕

（1） John Donne, *John Donne: The Divne Poems*. Ed. Helen Gardner. Oxford: Clarendon Press, 1969. p. xv.

（2） Helen Gardner, *Religion and literature*. London: Faber and Faber, 1971. p. 7.

（3） John Donne, *John Donne: The Divne Poems*. Ed. Helen Gardner. Oxford: Clarendon Press, 1969. p. xxx vii.

（4） *Loc. cit.*

（5） 榎十四郎著 『イエスと世俗社会』 東京　評論社　2001。pp. 73-75.

（6） (C.'Holy Sonnet 9') は、John Donne., *John Donne*. Ed. John Carey. Oxford: Oxford UP., 1990. で用いられている詩の番号を表わす。以下、本論における詩の番号はこの版による。p. 177.

（7） 『ペテロの第一の手紙』第 2 章24節。
以下日本語訳聖書は、2003年日本聖書教会発行の口語訳聖書からの引用である。

（8） *The Holy Bible: King James Version*. New York: American Bible Society, 2005. 1 Peter 2. 24.

（9） 『ルカの福音書』第23章34節。

(10) *The Holy Bible*, Luke 23. 34.

(11) John Donne, *John Donne*. Ed. John Carey. *op.cit*., p. 179.

(12) 『ペテロの第一の手紙』第 4 章 5 節。

(13) *The Holy Bible*, 1 Peter 4. 5.

(14) John Donne, *op.cit*., pp. 179-180.

(15) 『ローマ人への手紙』第 6 章 23節。

(16) *The HolyBible*, Romans 6. 23.

(17) 『創世記』第 2 章17節。

(18) *The Holy Bible*, Genesis 2. 17.

(19) 『創世記』第 9 章11節。

(20) *The Holy Bible*, Genesis 9. 11.

(21) 『詩篇』第69章 9 節。

(22) The Holy Bible, Psalms 69. 9.

(23) John Donne, *John Donne*. Ed. John Carey. *op.cit*., pp. 288-389.

Text;

John Donne, *John Donne*. Ed. John Carey. Oxford: Oxford UP., 1990.

〔引用・参考文献〕

The Holy Bible: King James Version. New York: American Bible Society, 2005.

Donne, John. *John Donne: The Divne Poems*. Ed. Helen Gardner. Oxford: Clarendon Press, 1969.

---. *The Poems of Jone Donne* ed. *from the old edition and numorous manuscripts with introd. & commentary*. by Herbert J. C. Grierson; v. 1, v. 2. London: Oxford UP, 1912.

---. *John Donne*. Ed. John Carey. Oxford: Oxford UP., 1990.

---. *John Donne's Poetry*. Ed. Arthur L. Clements, New York: Norton, 1992.

---. *The Complete English Poems*. Ed. C. A. Patrides. Everyman. 1991.

---. *The Cambridge Companion to John Donne*. Ed. Achsah Guibbory. Cambridge: Cambridge UP, 2006.

---. *The Complete English Poems*. Ed. C. A. Smith. London: Penguin, 1996.

---. *The Complete English Poems*. Ed. C. A. Smith. London: Allen Lane. 1974.

---. *Select Poems of John Donne*. 松浦嘉一編注　研究社。1983.

Eliot, Thomas Stearns. *Essays Ancient &Modern*. London: Faber and Faber, 1936.

Eliot, Thomas Stearns, Kazumi Yano with Introduction and Notes. *Religion and Literature & Other Essays*. Tokyo: Kenkyusha, 1942.

Keynes, Geoffrey. *A Bibliography of Dr. John Donne: Dean of Saint Paul's*. 4th ed. Oxford: Clorendon. 1973.

Gardner, Helen Louise. Ed. *John Donne: A Collection of Critical Essays*. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, c1962.

---. *Religion and Literature*. London: Faber and Faber, 1971.

Grierson, Herbert John Clifford. *Critism and Creation: Essays and Addresses*. London: Chatto, 1949.

Summers, Claude, and Ted-Larry Pebworth., eds. *The Eagle and the Dove: reassessing John Donne*. Columbia: U of Missouri P, 1986.

Zunder, William. *The Poetry of John Donne: Literature and Culture in the Elizabethan and Jacobean Period*. Brighton, Sussex: Harvest, 1982.

榎十四郎著　『イエスと世俗社会』　東京　評論社。2001.

『聖書　口語訳』　日本聖書教会。1989.

『聖書　新共同訳　旧約聖書続編つき』　日本聖書教会。2003.

湯浅　信之訳　『ジョン・ダン全詩集』　名古屋大学出版会　名古屋。1997.

（やまもと　ちずこ　　文学研究科英米文学専攻博士後期課程）

（指導：古我　正和　教授）

2008年９月24日受理